

遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する
法律に規定する第一種使用規程承認の申請に係る意見

1 第一種使用規程の承認の申請者、遺伝子組換え生物等の種類の名称及び第一種使用等の
内容

(1) 名称

グロブリンプロモーター誘導型 *nfGluA2* 蓄積イネ (*nfGluA2*、*2mALS*、*Oryza sativa* L.)
(*OsNV2*、*OsNV4*)

(2) 第一種使用等の内容

隔離ほ場における栽培、保管、運搬及び廃棄並びにこれらに付随する行為

(3) 申請者

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 理事長 井邊 時雄

2 当該申請に対する意見

(1) 生物多様性影響評価の結果について

①競合における優位性

提出された生物多様性影響評価書の競合における優位性については、以下の事項が記載されている。

本遺伝子組換えイネは、宿主であるイネに、イネ種子貯蔵蛋白質グルテリンのひとつである *GluA2* 蛋白質のアミノ酸配列の一部を 2 連結したノボキニンに置き換えた融合蛋白質遺伝子（以下「*nfGluA2* 遺伝子」という。）とビスピリバックナトリウム塩耐性遺伝子等を導入したものである。

本遺伝子組換えイネは、*nfGluA2* 遺伝子の導入により、高血圧時特異的に血圧降下作用を示す *nfGluA2* 蛋白質が蓄積されることが期待されるが、蓄積は種子特異的であり、他の形態・生理形質及び代謝系に影響を与えることは考えにくく、野生植物に対する競合における優位性を高めることは考えにくい。

本遺伝子組換えイネは、ビスピリバックナトリウム塩に対する耐性が付与されているが、ビスピリバック塩が自然条件下に高濃度で存在することは無いため、同物質への耐性を有することが、競合において優位に働くとは考えがたい。

さらに、本申請では、本遺伝子組換えイネについて、第一種使用規程に従って使用等し、隔離ほ場外への意図しない持ち出しを防止することとしている。

これらのことから、隔離ほ場における本遺伝子組換えイネの第一種使用等により影響を受ける可能性のある野生動植物等は特定されず、競合における優位性に起因する生物多様性影響が生じるおそれはないとの申請者による結論は妥当であると判断した。

②有害物質の産生性

提出された生物多様性影響評価書の有害物質の産生性については、以下の事項が記載されている。

本遺伝子組換えイネは、*nfGluA2* 遺伝子を発現し、同遺伝子の導入により、胚乳特異的に、*nfGluA2* 蛋白質を蓄積している。この *nfGluA2* 蛋白質はアレルゲンデータベースに類似性を示すものはない。また、本遺伝子組換えイネについて、植物へのアレロパシー活性を測定するため、レタスを用いた後作試験及び鋤込み試験を行ったが、本遺伝子組換えイネと宿主イネの間に有意な差は認められなかった。

本遺伝子組換えイネは、ビスピリバックナトリウム塩に対する耐性が付与されているが、イネの自然変異体と同一の配列を導入したものであり、イネ自然変異体が産生するものと同等である。

さらに、本申請では、本遺伝子組換えイネについて、第一種使用規程に従って使用等し、隔離ほ場外への意図しない持ち出しを防止することとしている。

これらのことから、隔離ほ場における本遺伝子組換えイネの第一種使用等により影響を受ける可能性のある野生動植物は特定されず、有害物質の産生性に起因する生物多様性影響が生じるおそれはないとの申請者による結論は妥当であると判断した。

③交雑性

提出された生物多様性影響評価書の交雑性については、以下の事項が記載されている。

野生種イネである *O. nivara*、*O. rufipogon* 等は、栽培種イネ (*O. sativa* L.) の近縁野生植物であり、交雑することが知られているが、これら近縁野生植物が我が国に自生するという報告はない。

さらに、本申請では、本遺伝子組換えイネについて、第一種使用規程に従って使用等し、隔離ほ場外への意図しない持ち出しを防止することとしている。

これらのことから、隔離ほ場における本遺伝子組換えイネの第一種使用等により影響を受ける可能性のある野生動植物等は特定されず、交雑性に起因する生物多様性影響が生じるおそれはないとの申請者による結論は妥当であると判断した。

(2) 生物多様性影響評価書を踏まえた結論

以上を踏まえ、本遺伝子組換えイネを第一種使用規程に従って使用等した場合に生物多様性影響が生ずるおそれはないとした生物多様性影響評価書の結論は妥当であると判断した。

3 意見を聴取した学識経験者

(敬称略 50音順)

氏名	現職	専門分野
あべ みつとも 阿部 光知	国立大学法人 東京大学大学院 理学系研究 科 准教授	植物分子遺伝学
ありえ つとむ 有江 力	国立大学法人 東京農工大学大学院 農学研 究院 教授	植物病理学
いさぎ ゆうじ 井鷲 裕司	国立大学法人 京都大学大学院 農学研究科 教授	生態学
いとう もとみ 伊藤 元己	国立大学法人 東京大学大学院 総合文化研 究科 教授	保全生態学
おおさわ りょう 大澤 良	国立大学法人 筑波大学生命環境系 教授	植物育種学
おさかべ ゆりこ 刑部 祐里子	国立大学法人 徳島大学 生物資源産業学 部 准教授	植物育種学
かとう ひさし 加藤 尚	国立大学法人 香川大学 農学部 教授	化学生態学 雑草学
しのざき かずこ 篠崎 和子	国立大学法人 東京大学大学院 農学生命科 学研究科 教授	植物生理学
しのはら けんじ 篠原 健司	国立研究開発法人 理化学研究所 環境資源 科学研究センター コーディネーター	植物生理学
つじもと ひさし 辻本 壽	国立大学法人 鳥取大学 乾燥地研究センタ ー 副センター長	植物遺伝育種学
よしだ かおる 吉田 薫	国立大学法人 東京大学大学院 農学生命科 学研究科 生圏システム学専攻 教授	植物育種学 保全生態学